

D.W. ウィニコットの『ピグル』に関する海外 文献の概観：ピグルの症状をめぐる背景要 因に焦点を当てて

丹羽, 郁夫 / NIWA, Ikuo

(出版者 / Publisher)

法政大学現代福祉学部現代福祉研究編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The bulletin of the Faculty of Social Policy and Administration :
reviewing research and practice for human and social well-being / 現代福
祉研究

(巻 / Volume)

11

(開始ページ / Start Page)

203

(終了ページ / End Page)

221

(発行年 / Year)

2011-03-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007410>

D. W. ウィニコットの『ピグル』に関する海外文献の概観

ーピグルの症状をめぐる背景要因に焦点を当ててー

丹 羽 郁 夫

【抄録】 本論文ではD. W. ウィニコットの『ピグル』に関する海外の先行研究を概観した。なかでも先行研究の争点であるクライアントの症状の背景要因に焦点を当てた。先行研究が提出する背景要因の仮説は、①妹の誕生、②母親の民族的背景、③父親による性的虐待、④母親の心理的問題の4つに分類できると考え、それぞれを検討した。その結果、妹の誕生を中心とした多要因の影響が妥当と考えられた。最後に、ウィニコットの背景要因に関する柔軟な考えを検討し、次のような特徴をもつことを推測した。それらは、①背景要因はさまざまな説明が可能である、②背景要因を無理に整合性のある体系にせず、矛盾する要因も含めたまま緩やかに理解する、③症状の背景要因に関する綿密な情報収集により仮説を固めることで治療者と治療プロセスを縛るのを避ける、④背景要因の理解は治療場でクライアントとの相互作用の中でクライアントに形成されることを重視する、である。

【キーワード】 文献レビュー、D. W. ウィニコット、ピグル、症状の背景要因、
Literature Review、D. W. Winnicott、Piggle、Background Factors of Symptoms

1. はじめに

D. W. ウィニコット (D. W. Winnicott : 1896-1971) は英国の小児科医であり、精神分析家である。彼はM. クライン (M. Klein) のスーパーバイズを受け、クライン学派のJ. リビエール (J. Riviere) から分析¹⁾を受けており、クライン学派に属したが後に離れている。しかし、もう一つの有力な学派であるA. フロイト (A. Freud) の自我心理学とも距離をとり、自らの学派も形成しなかったため、中間派あるいは独立派と呼ばれている。彼の臨床家としての才能は生前から高く評価されており、彼の精神分析を経験した精神分析家側から彼の優れた臨床実践を例示する報告が2つある。一つはGuntrip (1986)²⁾ が受けたW. R. フェアバーン (W. R. Fairbairn) の分析と比較した報告であり、もう一つはLittle (1990)³⁾ が受けたものである。ウィニコット自身からの事例報告の著書は3冊あり、それはウィニコットが子供の治療相談の技法として発展させたスキュグルの事例集

(Winnicott, 1971)、子供の児童分析を報告した『ピグル』(Winnicott, 1977)、そして大人の精神分析に関する記録の一部分(Winnicott, 1989)である。

なかでも本論文で扱う『ピグル』は、ピグルというニックネームをもつガブリエル⁴⁾という女の子の2歳半から5歳2カ月までの16回にわたる心理療法の詳細な記録の全経過である。この記録の間に母親からの手紙を中心に母親との面接や電話、父親からの手紙、そしてウィニコットからの手紙が記載されており、ガブリエルが家庭で示す奇妙な症状や行動などの状態とその変化がよく分かるようになっている。また治療経過に関するウィニコットの考えは、本文の中に、あるいはコメントや注として本文の欄外に書きこまれ、一つのセッションが終わるごとに、その要点の解説として加えられている。さらに治療終結後に記録の写しを読んだ母親のコメントもいくつか記載されており、最後には両親による「あとがき」がある。ここには、ウィニコット没後である『ピグル』出版2年前の1975年におけるガブリエルの様子が報告されている。この報告には、当時14歳頃のガブリエルが精神的に安定し、他の同年代の子供達と同じであると述べられており、ウィニコットの治療が成功していることを明らかにしている。そして、『ピグル』はウィニコットのほぼ晩年の治療報告である点から、彼の完成した子供の情緒発達理論とそれに基づく心理療法の理論および技法が最も具体的に理解できる素材である。

ガブリエルは妹が生まれてから、自分自身であることを拒否し、母親や赤ちゃんになりたがり、気力がなくなり、傷つきやすく、遊びが制限された。また、「黒ママ」、「黒ピグル」、「乳母車(babacar)」などに関する悪夢と空想に苦しめられ、夜遅くまで両親を求めずにはいられない深刻な睡眠障害、そして顔を引っ掻く自傷などの症状を呈していた。空想の中の黒ママはガブリエルのおっぱいを欲しがり、ガブリエルを黒にし、ガブリエルのお腹の中に住んでおり、よく病気になる、なかなか良くならなかった。しかし、この少女の家族はウィニコットのクリニックがあるロンドンから遠方に住んでいたため、定期的な児童分析が困難であり、少女の要請がある時のみ治療相談を行う特殊なやり方であるオン・ディマンド法(on demand)で治療が行われた。

この『ピグル』を中心に論じた英語で書かれた海外文献を検索したところ8つ発表されていることが分かった⁵⁾。この8つの海外文献の内2つは『ピグル』の本の紹介であり、6つは論文であった。この6つの論文の焦点は大きく2つに分けられると考えられる。主要な焦点はガブリエルの症状の背景要因であり、いくつかの異なる仮説が提示されている。この背景要因に関する複数の仮説は、特殊な1つを除いて、お互いに他の文献を批判することはないものの、一つの争点となっている。もう一つは、程度の差はあるが全ての論文が言及している『ピグル』の治療のプロセスとそこに見られるウィニコットの治療理論と技法である。特に、後者に関しては2つの論文が治療の終結の仕方に焦点を当てた検討を行っている。

日本では北山が1985年の『錯覚と脱錯覚』において海外に先駆けて『ピグル』の全経過を論じ、ウィニコットの理論と技法の多くの解説を試みる優れた仕事を行っている⁶⁾。そこで本論文では、海外の文献の争点であり、日本にはほとんど知られていないガブリエルの症状とその背景要因に関する海外文献が提示する仮説を紹介し、検討を加える予定である。そして、ウィニコットの背景要因に関する考え方を最後に検討する。なお、『ピグル』には既に翻訳が存在するが、北山(2004)が「一部を除いて筆者と読みの違うところが多かった」(P.6)と述べており、筆者とも異なる部分があった。そのため、本論文で『ピグル』の記述に言及する場合、翻訳を参考にすが、筆者が訳したものをを用いる。また、本論文で『ピグル』から引用する場合は原文のページを記す。

2. 海外の文献が提出する『ピグル』の症状の背景要因

『ピグル』に関して海外で最も早く発表されたのは書評である。『ピグル』出版の2年後に、ユング派の研究雑誌に精神分析の影響を強く受けたロンドン学派(発達派)のFordham(1978)によって『ピグル』は最初に紹介された。次は、その2年後に子供と青年の心理学と精神医学の両方をカバーする研究雑誌にHood(1980)によって紹介されている。この2つは書評ということもあり、背景要因までは言及していない。この後は論文が続くが、最初の論文は1992年に発表されており、『ピグル』出版の15年後である⁷⁾。そして、これら海外文献の焦点の一つは、上で述べたようにガブリエルの症状の背景要因である。複数の仮説があるが、論文の多くは妹の誕生を強調している。実際、『ピグル』には、両親がガブリエルの問題を早すぎる妹の誕生と考え、これに関連する重要な記述がみられる。例えば、ガブリエルに妹が生まれた時期から明らかな症状が表れたこと、ガブリエルの母親もちょうど同じ時期に弟が生まれ、同じ苦しみを体験していることなどが記述されている。したがって、この仮説を支持すると考えられる先行研究は最も多く、3つある(Jemstedt, 1993; Chales, 1999; Chazan, 1997)。また、『ピグル』に関する書評2つとウィニコットの終結に関する理論にのみ焦点を当てたReeves(2006)も背景要因について触れていない点で、消極的にはあるが、この仮説を支持していると言えるだろう。

ガブリエルの症状の背景要因に関して複数の仮説が生じた要因は2つ考えられる。第一に、ウィニコットがガブリエルの症状の背景要因として妹の誕生を重視していることは間違いないが、他の要因を示唆する記載を『ピグル』に多く残し、さらに背景要因をはっきりと述べていないことである。第二に、妹や弟が生まれ、それに対処できないという理由だけで、ガブリエルが示すような深刻で奇妙な症状や行動が表れるのだろうかという疑問である。以上の2要因から妹の誕生以外を主な

原因と考える仮説がいくつか提出され、それらは3つに分類できると考えられた。発表された年代順にあげると次のようになる。一つは母親の民族的な背景に焦点を当てた仮説 (Hogan, 1992)、二つめはガブリエルが父親によって性的虐待を受けていたという仮説 (Ternell, 1993)、三つめは母親の心理的問題を強調した仮説である (Koepele & Teixeira, 2000)。以下に4つの仮説を紹介したい。

(1) 妹の誕生仮説

前述したように両親が妹の誕生をガブリエルの問題の原因と考え、ウィニコット自身も重視したために、これをめぐる記述が『ピグル』には多く記載されている。特にウィニコットが序で、「成熟段階」は「ガブリエルの乳児期、すなわち母親が妊娠する前は、確かに満足に体験されていた」(p. 3)と記述したことと、母親からの最初の手紙に、ガブリエルが1歳9カ月の時に妹が生まれたのは「彼女にはあまりにも早すぎたように思いました。そしてこのことと、それに対する私たちの不安が彼女に大きな変化をもたらしたようでした(と私は思います)」(p. 6)と報告したことが『ピグル』の初めに示されている。このため、多くの読者は早い段階でガブリエルの症状の原因を妹の誕生とみなすと考えられる。それゆえ、妹の誕生を主要因とみなす考えは明確な主張が行われることなく支持されるという特徴がある。以下に、この仮説を支持すると考えられるJemstedt (1993)、Chazan (1997)、そしてChales (1999)の3つの仮説を紹介する。

① Jemstedt (1993) の仮説

Jemstedt (1993) はTernell (1993) の父親による性的虐待仮説を批判することを主目的とする論文を書いている。そのなかで、ガブリエルの症状の背景要因は複雑であり、一つのこと限定すべきではないとしながらも、ガブリエルの問題が妹の誕生から始まったこと、その根底に母親自身が同じ年齢の時に同胞が生まれたこと、妹を生んだ時に母親に不安が生じたことについての『ピグル』の記述に言及している。そして、ガブリエルが表わす素材は、もっと複雑であるが、少なくとも妹とのきょうだい葛藤と父親をめぐる母親とのエディプス空想という二重のライバル状況とそれが引き起こす憎しみと嫉妬によって彩られていると述べている。また、ガブリエルの遊びと存在の仕方には抑うつ不安、強い罪悪感とそれに関連した償いの徴候が多くあり、そこには自分の生の感情が自分の愛する人たちと自分自身を破壊するのではないかという不安があると述べている。そしてガブリエルが示す「黒」はその源に憎しみ、攻撃性、そして抑うつ不安をもっており、これらの感情をコンテインできないため、内的現実と外的現実の区別が曖昧になり、投影同一視と取り入れ同一視の循環にとらわれ、母親、時に妹や自分自身とその内側を黒にしたとしている。例えば、1セッ

ションの後の母親からの手紙に報告された「乳母車は私からあなたに黒を運んで行くから私はあなたが怖い」というガブリエルから母親への発言は、彼女の迫害不安は投影同一視の循環の結果としてみることが可能であると指摘している。そして、それはガブリエルのアイデンティティを混乱させ、弱めていると述べている。以上のJemstedtの考えは、ガブリエルの症状の多くは妹の誕生と年齢相応のエディプス空想から理解できることを示している。そして、自他の境界がやや弱く、迫害不安を表しているものの、三者関係である嫉妬、抑うつポジションの指標である抑うつ不安、罪悪感、償いがみられると述べており、妹の誕生仮説を主張するChales (1999) や母親の心理的問題仮説を唱えるKoepele と Teixeira(2000)よりも健康なガブリエル像を提示していると考えられる。

② Chazan (1997) の仮説

Chazan (1997) は『ピグル』の終結に焦点を当てて治療プロセスを論じているが、背景要因に関して、「ガブリエルの場合、不安定と良い感情の喪失をもたらしたのは同胞の誕生である」(p. 227)と記している。そして、同胞の誕生により両親が情緒的あるいは物理的に不在になれば子供を子供自身の破壊的衝動から守られないと述べている。また、治療の最初のテーマは妹への羨望と競争であったとしている。そしてChazanは妹の誕生だけでなく、これに関連した他のさまざまな要因も検討している。ガブリエル側の要因としては、ウィニコットが1セッション後のコメントで、ガブリエルが単純なアンビバレントへの用意ができていなかったと記述したことを取り上げている。そのため、ガブリエルは以前の母親と不在の母親とを統合できず、退行して、分離や死という欠如を表わす「黒」を用いて、妹の誕生によって生じる良い母親の喪失を防衛したと推測している。よって、「黒ママ」は赤ちゃんを理解しない母親、あるいは喪失したとてもよく理解する母親であると述べている。さらに両親の側の要因も2つ指摘している。一つは、1セッション後の父親からの手紙で、妹が生れた時期に両親の間に緊張があったことが報告されており、これが黒ママのイメージに反映した可能性を推測している。もう一つは、1セッション後の母親からの電話において、子供のもつ空想を通して葛藤を解決する試みの肯定的側面を理解する能力が両親にないというウィニコットのコメントを取り上げている⁸⁾。このことから、Chazanはガブリエルの症状は子供が自分の空想を遊びで表現するのを妨害せずに支持し、許容することを両親ができないことが関連すると指摘している。

③ Chales (1999) の仮説

Chales (1999) は、自分自身が幼い息子を亡くした体験、自分が5歳の時に妹が生まれて母親を奪われた体験、そして妹の存在を否定したケースなどを『ピグル』と重ね合わせて論文を記述して

おり、喪失および下のきょうだいの誕生に焦点を当てている。また、西洋の文化では新しい赤ちゃんの誕生はたいてい母親の不在を伴うことを指摘し、Chazanと同様、ガブリエルが妹の誕生によって母親の不在に直面したと主張している。このようにChalesはガブリエルの病理の背景要因を妹の誕生と考えており、1歳9カ月の妹誕生後まで目立ったものはなかったという母親の報告にも言及している。

さらにChalesは、妹の誕生に加え、ガブリエルの母親自身が同様に1歳9カ月の時に同胞に侵入された体験を強調している。そして、この母親の体験がガブリエルに影響した可能性を以下のように述べている。母親はこの体験が未解決であり、自分の母子関係の喪失を哀しめていないために、ガブリエルが母子関係の喪失を哀しむ取り組みを妨げた。また、母親には喜んで新しい子供を迎える一方で、最初の子供に与える混乱させ弱らせる影響への無意識的恐怖というアンビバレンスが生じ、ガブリエルがアンビバレンスを調整するのを助けられなかった。さらに、侵入者を入れて、母親/子供が単一であるという錯覚を破壊したことへの罪悪感も母親に生じ、これによりガブリエルは妹の誕生をより複雑に体験した。またChalesはガブリエルが妹の誕生で体験した苦しみを説明する脆弱性のもう一つの要因として、妹の誕生前の母親との関係が父親との関係よりも離れていたことを指摘している。この要因は、妹の誕生より前の母子関係の問題を示唆する可能性があるが、Chalesはそこまでは言及していない。

そして、妹の誕生に対処できなかったガブリエルの示す症状には圧縮と等価という原始的な心の動きが見られるとし、これらを理解するためにMatte-Blanco (1975, 1988) の非対称的論理 *asymmetrical logic* と対称的論理 *symmetrical logic* の考えをChalesは援用している。この非対称的論理は意識的な思考であり、差異の領域であり、逆が不可能である。それに対して対称的論理は無意識的思考であり、類似の領域であり、逆が可能である。したがって後者は、置き換え、圧縮、無時間性、相互矛盾と否定の欠如、外的現実と内的現実の交替、部分が全体になること、似ていないものが類似するといった特徴をもつ。ガブリエルは強い感情を体験したことで対称的論理が優勢となり、以下にあげるような無意識の論理が日常生活に表れたとChalesは述べている。

S. Freud (1900) が幼い子供にとって不在と死の区別はまだ明確でないことを記しているように、ガブリエルにとって不在=死であり、さらに死=悪=黒であった。そのため母親の不在は、一人だけの娘を持った完全な調律という錯覚を共有する母親の死であり、自分との立場が以前よりも不安定な母親との直面である。すなわち良い母親の不在=悪い/黒い母親の存在である。そして母親とガブリエルと妹、部分(乳房)と全体(母親)の区別がまだ明確でないため、ガブリエルは彼女の母親であり、母親の乳房はガブリエルの部分である。また母親の乳房の不在は、母親の不在であり、それは「悪いピグル」の「黒ママ」である。そして、これまでの母子関係の破壊によってガブリエル

に生じた怒りが赤ちゃん（妹）へ向い、妹を殺すとそれは母親を殺すことになり、それはさらに自分の破壊になる。すなわち母親の不在はガブリエルの不在（消滅）であり、ガブリエルは黒い/不在の赤ちゃんになる。したがって、ガブリエルの「黒」は、ガブリエルの悪さであり、そこにはガブリエルの羨望、貪欲さ、自分の万能感への攻撃に対する怒り、自分の感情の強さによって生じたすさまじい恐怖が圧縮されている。そして、以上のガブリエルの心の世界は妄想-分裂ポジションを表わすとChalesは指摘している。また「乳母車」は、母親とガブリエルとの関係に侵入した「赤ちゃんを運ぶもの」としての母親の子宮などを表していると述べている。

ガブリエルはまた上記した母親の不在に対してさまざまな防衛を行っており、それがまた症状の形成に関与している。Chalesは以下の例をあげている。昼間、不在を示す黒をはねつけようとして、ガブリエルは分類し、掃除をするなどで時間を過ごしたが、一人の夜は、暗闇が母親不在の感覚をさらに強化し、それはガブリエルを「乳母車」に連れ去る「黒ママ」として表れた。また、母親を取り込むことで母親の喪失を否認する試みは、内側に異質なような感覚を生み、黒ママがお腹の中に住んで電話で話しかける空想を形成した。そして、母親の重要性を否認するため、ガブリエル自身として話しかけられることを拒否し、母親に取って代わることを試みたが、これには自己破壊を伴った。

（２） 母親の民族的背景仮説

『ピグル』に関する最初の論文はHogan (1992) によるものであり、ガブリエルの症状の発生と醸成が母親の民族的背景と同時代の人種差別に関連する動きの影響を受けていることを指摘する特殊な視点からの考察である。この仮説はその後に続く、ガブリエルの症状の背景要因に関する論争に最初に投げられたものである。Hoganは精神分析の実践において、もっぱら「私的」な事柄に焦点を当て、「公的」及び「政治的」なものを排除する傾向に異議を申し立てている。そしてFanon (1967) の論文とLacan (1974) の象徴的秩序と他者の概念に注目して、『ピグル』の症例には重要な政治的なテーマが繰り返し表れていることを指摘している。その理由として、1セッション後の母親との面接における「母親の母語はドイツ語であり、父親は英語である」(p. 13) というウィニコットの記述の仕方が母親が単にドイツ人であるという姿勢ではないとHongは主張する。そして、母親がナチス・ドイツからのユダヤ人亡命者であるか、ドイツの外部出身のドイツ民族であり、ヒットラーが解放しようとした地方の一つで生まれ育った⁹⁾ という2つの可能性を指摘している。すなわち、ガブリエルの前史は民族差別主義で満たされている可能性を指摘している。このような通時的な要因によって民族差別に対する感受性がガブリエルに育まれた可能性を推測している。さらに、共時的には同時代に南アフリカとアメリカの黒人の自由化運動と市民権運動および英国での人種差別に反対す

る法案の検討がテレビやラジオのようなメディアを通して繰り返し家庭の中に入り込んでいた可能性が高いことから、これらの影響をガブリエルが強く受けたと指摘している。

以上の主張の根拠としてHoganは以下の例をあげている。黒ママの「黒」はウィニコットが述べる「悪い」という象徴的な意味だけでなく、9セッションでガブリエルが黒ママを「黒い顔の母親」(p. 114)と述べていることや黒ママとトルコ人を結び付けている(p. 113)こと等から文字通りの肌の黒さという人種や民族を表わしていることを取りあげている。さらに黒ママが言っているとされる「おっぱい(yams)」は黒人の食べ物であるヤムイモと関連していること、妹の呼び方である「サッシュ・ベビー」はアメリカの黒人コミュニティの暴力と愛に関するオペラ『サマータイム』に登場する歌のリフレイン(“So hush, little baby, don’ yo’ cry”)に由来すると推測できると述べている。そしてガブリエルが表わすさまざまな暴力が当時のアメリカ南部で起きていた暴動やリンチなどの人種差別の暴力と類似していることを指摘している。例えば、1セッション後の父親からの手紙に報告された、絞首刑を暗示する人の首が固まるというガブリエルの悪夢(p. 19)、3セッション後に母親が休暇で外国に滞在している時に書いた手紙に報告された、ガブリエルが母親の頭に石を投げたこと(p. 51)、4セッション後の母親からの手紙に報告された、ガラスが粉々にばらまかれたガブリエルの空想(p. 65)、9セッションに記された、黒ママを撃つ話でガブリエルの「あなたはTVで多くの人が撃たれているのを知っているの」という発言(p. 117~118)である。

(3) 父親による性的虐待仮説

① Ternell (1993) の仮説

Horganの論文の1年後には、ガブリエルの症状の要因として父親からの性的虐待を指摘する論文が発表されている。この仮説は、この仮説を批判する論文と一緒に掲載されていることから、掲載に際して研究誌の編集者内で論争があったことが伺える。父親による性的虐待説を提出したのはTernell (1993) である。Ternellはガブリエルは性的虐待を受けた少女であり、治療の間、何度も実際に起きていることを話そうと試み続けているが、ウィニコットの逆転移とオン・ダイヤモンド法という治療構造の弱さのために理解されていないと主張している。逆転移の要因としてウィニコットとガブリエルの両親とは患者の単なる両親として以上の、個人的もしくは専門的は関係をもっているために、その仲間が性的虐待を行っているという考えに治療者が耐えられなかったと推測している。そしてオン・ダイヤモンドのもつ治療構造があまりにも弱いため、強い逆転移感情に耐えられず、両親からの要請にもかかわらず、ウィニコットは11セッション(6月16日)の後、あまりにも長い間、次の12セッション(10月8日)まで治療を拒否したと主張している。

Ternellはガブリエルの症状には性的虐待の指標が多く示されていると主張している。例えば、ガ

ブリエルが示す「黒」に関しては、Fairbairn (1952) が性的虐待児とのワークで気づいた、子供が良い現実の対象を守るために、この対象の悪い部分に同一化して、自分自身を悪いと体験するという考えを用いて解説している。すなわちガブリエルは良い信頼できる親の世話の中で安全であるという感覚を守るために、自分が悪を担い、自己破壊的に振る舞い、自分自身を「黒い」と語っていると述べる。またガブリエルの示す混乱は、父親による性的虐待のトラウマが圧倒的すぎ、原始的な防衛機制を用いているためであり、部分対象関係に留まっているからであると説明している。そしてTernellはウィニコットが正常なエディパルな空想と考えている事柄を性的虐待の指標であると主張している。

ガブリエルが性的虐待を受けた子供であることを示す具体的な点をTernellは以下のようにいくつかあげている。例えば、最初のセッションにおいて、ガブリエルが赤ちゃんであり、ベビーベッドで眠っている設定で、なめている (licking) ようなことを言い¹⁰⁾、ウィニコットがそれを尋ねると、ガブリエルは「いいえ、私はしてなかった」と否認した。その後にガブリエルは小さな男性の人形を玩具の車に入れようとしたが入らず、「入らない。ひっかかてる」と言い、小さな棒をとって、それを窓から差し込んで「棒は入る」と言う。するとガブリエルに不安が生じ、遊びを中断して待合室の母親のところに出て行っている。この1セッションの後の母親との面接で、ガブリエルは今や「パパ」という言葉を使わないと報告されたことを取りあげている。2セッションの後の母親からの手紙では、ガブリエルが自分の傷ついたおしっこをすところを指し、それを母親は「おむつか、こすられたかで、少し赤いわね」と言ったことが報告されている。6セッションでは、赤ちゃんを作っているようなやり方で2つの貨車で遊び、それを尋ねるウィニコットに対し、「そうよ、時々私は太陽がなくなると、足をあげて仰向けに眠るの」と述べ、実演している。11セッションでは、「女の子の穴の中のパパのおちんちん」と直接述べており、その後に父親のペニスへの怒りを表現していることを取り上げている。また治療場面においてガブリエルが7セッションでウィニコットの足や膝に偶然触れること、そして11セッションでウィニコットのペニスの辺りに車を時々置くことなどには、性的被虐待児に見られる大人への誘惑的な接近があると指摘している。そして、15セッションではガブリエルのうわつきと誘惑が高まり、下着を見せ、また小さな電球を口の中に入れた後、治療者を意味ありげに見て、スカートをまくって下着の中に入れており、その後で父親の人形を虐待する遊びを始めたことに言及している。

② Jemstedt (1993) によるTernellの仮説への反論

Jemstedt (1993) はTernellの論文に対して、複雑で豊かで深い臨床素材を性的虐待という唯一の考えにまとめてしまうことの危険性と、その構成が判決的で閉鎖的である点を批判している。そし

て、Ternellが自分の仮説を支持する素材のみを選んで『ピグル』を検討し、自分の仮説に合わない素材を除外していると指摘している、例えば、妹の出現と存在についてのガブリエルの強く葛藤的な感情を中心とした素材などを排除していると述べている。そして、素材を部分的に選択しているため、ガブリエルとウィニコットとの相互作用や解釈をもたらした数セッションにわたるプロセスを無視していると主張する。例えば、Ternellは父親の人形を虐待したプレイを取り上げているが、それは近づく治療の終結と転移の解消を扱うセッションが始まったプロセスから生じたものであるとしている。すなわち、ガブリエルが「治療-ウィニコット」を破壊して使い果たしたためであると述べ、父親の虐待の証拠ではないことを指摘している。またJemstedtはTernellの誤解についてもいくつ指摘している。例えば、11セッションと12セッションの間の長い休止期間に関しても、Ternellがウィニコットの逆転移の表れと記述していることに対して、『ピグル』の注で病気に言及されていることを見落としていると述べている。さらにガブリエルと父親との関係に関して、ガブリエルが「パパ」という言葉を使わなくなった時期が生後6ヵ月であることを、Ternellがガブリエルの問題が始まった時期と誤って理解している点を取り上げている。そして、Jemstedtは『ピグル』に記述される父親はTernellの言う性的犯罪者像とは異なることを主張する。例えば、1セッションでのガブリエルが「父親に深く愛着していることは明らかだった」(p. 12)というウィニコットによる記述、ガブリエルによって使用されたセッションで父親が安全基地として機能していること、そして両親の手紙からの家庭での父親の印象は娘の性的虐待者としての父親とは一致しないと述べている。

(4) 母親の心理的問題仮説

KoepeleとTeixeira (2000) はガブリエルの症状を妹の誕生に焦点を当てて論じているが、論文のいたるところに妹の誕生だけには収まらない記述が存在するため、筆者は母親の心理的問題仮説の方が相応しいと考えた。この仮説は、母親に心理的問題があるため、ガブリエルは妹の誕生前のかなり早期からウィニコットとの治療時まで不安定でトラウマ的な母子関係を継続して体験しており、それが症状を形成しているという推測である。そこで、この妹の誕生仮説とは似て非なる仮説について説明したい。まず、KoepeleとTeixeiraはガブリエルの症状は迫害的な絶滅不安であるとした。そして、この不安が生じた要因として、愛着の不安定さと環境の侵襲と喪失のトラウマ的な連続をガブリエルが体験していることを指摘している。よって、ガブリエルの症状である「黒ママ」、「乳母車」、黒ママにトイレに閉じ込められること、黒にされることの恐怖と悪夢は、上記の体験と関連する迫害的な絶滅不安が母親にコンテインされないで噴出していることの表われとしている。この不安が生じた時期として、前記したように、KoepeleとTeixeiraは妹の誕生を強調している。

すなわち、ガブリエルの生後15カ月から21カ月の間に、母親が妊娠したことに対する彼女の気持ち
が彼女の自我に侵襲し、母親的な存在の重要性が既に主観的に損なわれていたことと合わせて彼女
のまだ成熟していない自我を圧倒したと述べている。上記の母親の重要性の損傷に関しては人生の
最初の数カ月からガブリエルが母親にいくぶん横柄であり、父親に愛着行動を向けていた事実を指
している。そして、妹の実際の誕生によってガブリエルに想像を絶する不安が生じたと述べている。
この不安は、母親のものであるものの否認されているガブリエルへの競合的で破壊的な衝動に対し
て彼女がそれを自分にあると思う同一視的理解、ガブリエル自身の攻撃性とそのために復讐される
ことへの恐怖が不安を増大したこと、そしてこの不安が父親さえコンテインできないとガブリエル
が知ったことから生じたと述べている。この他に、父親から報告された妹の誕生時に生じた両親間
の緊張の時期による母子愛着関係への影響も指摘している。

上記の妹の誕生時に影響した母親からガブリエルへの攻撃性に関して、その起源はガブリエルの
誕生にあることをKoepeleとTexeiraは示している。著者らは、想像を絶する不安を体験した子供が
親の子供の死を望む無意識の願望に取り組んでいるというウィニコットの記述 (Winnicott, 1967)
を記し、その後にウィニコットの著作集の編者であるShepherd, Johns、そしてRobinson (1996) が
序章の注で注意を促した、カップルとしての母親と父親の間に赤ちゃんが出現したことで新しいエ
ディパルな三角形が形成されるという仮説を引用している。つまりガブリエルが生まれたことから、
ガブリエルに対して無意識の憎しみが母親に生じた可能性を主張している。この父親をめぐるガブ
リエルへの母親の憎しみの根拠として、KoepeleとTexeiraは4セッションでの「お母さんはお父さ
んの小さな女の子でいたい」というガブリエルの発言を取り上げている。したがって黒ママは以
下に述べるような負の情動を含んだ圧縮された主観的現実の具体的表象であると述べている。まず、
母親がガブリエルの不在を望んでいるという恐ろしく、不快な認識、そしてそこには恐怖、痛み、
抑うつが伴っており、母親によって排除されるものへの同一視に支配された不安があるとす。さ
らに、それはガブリエルをコンテインしたいー調律したい願望が不在であることであり、「消えてな
くなること」をガブリエルが望んでいる迫害の対象が仕返して空想上戻す恐怖を表わすとしている。

また、上で言及したガブリエルの父親への接近に関して、KoepeleとTexeiraは母親との不安定な
愛着からガブリエルが父親へ代理的な補償的な愛着を試みたと推測している。そして父親がガブ
リエルの不安をコンテインできない点に関しては、4セッションで、父親からガブリエルが生れるゲ
ームー母親の身体以外から生まれたかったというガブリエルの願望の劇化と著者らは考察ーを父親
が「もうたくさんだから止めよう」と言い始めたことを取りあげている。この発言を、適切にコン
テインできない父親である証拠としてあげ、父親の母親代理としての限界と考えた。

以上のように、KoepeleとTexeiraはガブリエルの症状の背景要因を妹の誕生よりもかなり早期で

あるガブリエルの誕生時から存在した可能性を指摘している。以下の記述もこの可能性を支持する。それは、1セッション後の母親との面接で語られた「ピガ」(ピグルのこと)は「行ってしまった」というガブリエルの発言を「母親が妹のスーザンを妊娠した前、間、あるいはその後？」(p.240)に母親によって情緒的に「落とされた」ガブリエルのトラウマ的な気持ちの劇化であると記述していることである。この「？」は母親の攻撃性によるガブリエルのトラウマ的な体験を著者らは妹の妊娠および誕生時に限定していないことを示している。

母親の心理的問題がウィニコットとの治療時まで続いていたことは次の記述が示している。KoepelerとTexeiraは母親がガブリエルに対して攻撃性を持ち、そのことへの罪悪感で苦しんでいたが、その攻撃性は全てガブリエルが母親に対してもっていると考えていたと主張し、その証拠として治療継続中の出来事に言及している。それは3セッションの後の母親からの3つめの手紙に書かれた母親の攻撃性の噴出である。そこには、ガブリエルが店で母親のスカートをしつこく上げようとしたので母親はガブリエルを叩いたが、それを忘れたこと、そして母親が妹をドアにぶつけたことを記述しており、それぞれの後にガブリエルが罪悪感を示したことが書かれている。また、著者らは母親が治療相談の紹介の後一度もガブリエルに付添っていないことも指摘し、これを母親の不在という母親側の無意識の(再)劇化と解釈している。

他に以下の例を、KoepelerとTexeiraはガブリエルが母親との間で不安定でトラウマ的な関係を体験の表れとしてあげている。まず、ガブリエルは母親が自分に対して身体的・心理的に破壊的に振る舞ったことを認めるのに耐えられないため、この十分な意味を回避するために一次過程の離れた領域に隠したと主張している。その一次過程に隔離された迫害的絶滅不安の象徴的および非象徴的内容は、Chalesと同様、一次過程の原理である圧縮、置き換え、反転、対立するものへの同一視、そしてスプリッティングにしたがって「黒ママ」や「乳母車」に表わされていると述べている。例えば、9セッションでは、ガブリエルは母親が子供をどのように世話をしたらよいか知らなかったことを黒ママという形で語っていることを取りあげている。さらに、Greenberg と Mitchell (1983)が主張した、環境の侵襲への予期と反応に対して早熟な認知的発達の防衛的側面である「偽りの自己」がガブリエルに存在することを引用している。また、ガブリエルが治療場面で繰り返す、家から持ってきたもの(母親の現実の表象であり、愛着関係の最初の明らかな象徴である移行対象)を置いて帰ろうとした行動(1セッション: テディベア¹¹⁾、2セッション: 小さな人形「赤ちゃん」、10セッション: 大きな人形「フランシス」)はガブリエルが母親から置いておかれた体験の劇化と考えている。また、ガブリエルが自分の心の混乱に対して行った防衛については、かたづける/きちんとする防衛(1セッションでセッション後の部屋、3セッションの後の母親の手紙で暗闇、5セッションの後の母親の手紙で黒ママ、そして7セッションの後の手紙で母親、をかたづけている)や

防衛的な傷つきにくさである自閉的防衛・回避型愛着（6セッションで両親やウィニコットがなくてもやっていける、7セッションで「フランスにいる時、誰も一緒に居て欲しくなかった」、7セッション後の母親の手紙で「お母さんに死んでほしい」、というガブリエルの発言）をあげている。

3. ガブリエルの症状の背景要因に関する検討

以上に紹介した背景要因に関する4つの仮説を以下にそれぞれ検討したい。

(1) 妹の誕生仮説の検討

Jemstedt (1993)、Chazan (1997)、そしてChales (1999) の仮説を紹介したが、3人とも妹の誕生のみをガブリエルの問題の原因と考えていない。他に、母親自身がガブリエルと同じ年齢に同胞が生まれていたこと、それにより妹の誕生時に母親に強い不安が生じたこと、ガブリエルに単純なアンビバレントへの準備ができていなかったこと、夫婦間に緊張の時期があったこと、両親が子供の空想を通して葛藤を解決する積極的な取り組みの肯定的側面を理解できなかったこと、妹の誕生より前にガブリエルと母親との関係が父親よりも離れていたことがあげられている。

また上記の3人が指摘した諸要因以外にも、『ピグル』には妹の誕生仮説と関連する他の要因が記載されている。一つは、ガブリエル側の要因として、同年齢の子供たちも感じていることを表現する能力がガブリエルは特別であり、これには両親が子供に対して感受性があり寛容であることが関連していることをウィニコットが5セッション後の手紙で述べている。もう一つは、1セッション後の父親の手紙にウィニコットが両親に「わかりすぎた」と述べていたことが記されていることである。これは、手紙の文脈から、両親（母親だけでなく父親も）がガブリエルの気持ちを理解しすぎて、下の子供を早く生まないように計画できなかったことに対し混乱と罪悪感を感じ、それがガブリエルに影響したことを指すと推測できる。

以上から、妹の誕生仮説は単一の要因についての仮説というよりも、妹の誕生を中心とした多要因仮説とすることができる。したがって、妹の誕生だけではなく、さまざまなガブリエルの側と両親の側の要因、そして双方の相互作用が影響していると考えれば、ガブリエルの示した症状の深刻さは了解できるであろう。妹の誕生より前にガブリエルと母親との間に距離があったものの、母親は基本的に健康であり、妹の出産時にガブリエルの苦しみに十分に対応できなかったことが症状の主要因と考えられる¹²⁾。

(2) 母親の民族的背景仮説の検討

この仮説は母親の母語がドイツ語であることから、母親に民族差別を受けた体験が存在することを指摘するという少々強引な推測から出発している。さらに、ガブリエルの表わす症状や言動がユダヤ民族やドイツ民族ではなく黒人と関連することは、母親が黒人ではないガブリエルの症状の原因を民族差別とは考え難いと思われる。指摘されている当時のアメリカ南部で起きていた暴動やリンチなどの人種差別の暴力がガブリエルの病理的な表れと似ていることは症状の発生原因の証拠と考えるよりも、症状の内容にある程度影響した可能性があるとした方が妥当と考えられる。

(3) 父親による性的虐待仮説の検討

この仮説の問題点は、一緒に掲載されたJemstedt (1993) の論文で指摘されているように、Ternellが自分の仮説に一致する部分を前後のプロセスを無視して取り上げ、仮説に合わない点を合うように誤解し、あるいは排除している点にある。そして最も大きな問題点は、ウィニコットがガブリエルの問題を父親による性的虐待と認識せず、虐待によるトラウマを取り扱っていないにもかかわらず治療が成功していることであろう。Ternellも治療の成功を認めており、その要因としてガブリエルが大なり小なり間接的にトラウマについて語ったことがカタルシス効果をもったことや、実際の性的虐待が何らかの理由で終わっていることを推測している。しかし、直接扱うことなく、性的虐待を16セッションで治療できるとは通常は考えられない。

(4) 母親の心理的問題の検討

KoepeleとTeixeira (2000) の記述の多くは妹の誕生仮説およびそれに関連する他の要因に関する記述と重なっている。しかし、KoepeleとTeixeiraはガブリエルが生まれた時から母親がガブリエルに対して消滅を望む攻撃を無意識に向けていたこととウィニコットとの治療時においても母親の攻撃性が続いていることを記述しており、母親自身の心理的問題の存在を強調している。つまり、妹の誕生仮説が母親の不在とそれに伴うガブリエルからの攻撃性を主張するのに対して、KoepeleとTeixeiraは母親からの攻撃性を強調している点で大きく異なっている。また母親代理としての父親の限界にも言及しており、著者らはガブリエルの両親の要因に注目している。

しかし、KoepeleとTeixeiraが述べるようにガブリエルの症状が絶滅不安の表れであるとみなすと『ピグル』の記述との矛盾がいくつか生じる。Winnicott (1960) によると、絶滅不安は母親の世話に気づけない絶対依存段階という最早期の母子関係において、抱える環境としての母親の失敗により外部からの侵襲を防ぐことができず、乳児が反応を余儀なくされたために「存在することの連続性」が中断することによって生じるとされる。すなわち、絶滅不安は自分がばらばらになり、なくな

ってしまう重度の精神病的不安である。クライン学派でも絶滅不安は妄想ー分裂ポジションの迫害的不安より早期の最も根源的な不安と考えられている。それに対して、ウィニコットは序や6セッション後の両親への手紙で、ガブリエルの健康さを繰り返し指摘している。また、このような重度の不安であれば16回のセッションのみで治ることは考えられないだろう。KoepeleとTexeiraによる『ピグル』に報告されている素材への個々の解釈は興味深いが、ガブリエルの症状が絶滅不安のような重度の病理を示しているとは考えにくい。それと合わせて、両親の問題、特に母親の攻撃性（この原因を著者らは検討していない）を強調しているものの、主張されるほど母親の心理的問題は深刻ではないと推測される。まえがきに、ガブリエルの両親と治療を共有したこと、そのことで両親は自信が侵されなかったし、逆にウィニコットに干渉もしなかったと述べたウィニコットのメモが紹介されている。ここには、ウィニコットから母親への信頼が見られ、母親もそれに応えたことが示されている。また、母親が主張される程の攻撃性をもっていたとすると、母親に心理療法を直接実施することなくガブリエルの症状がなくなることは考えがたい。この母親の心理的問題仮説は妹誕生前のガブリエルと母親との間の距離を説明する唯一の挑戦的な試みであるが、母親を過度に問題視していると考えられる。

（5）背景要因の検討に関する総括

以上の4仮説の検討から、ガブリエルの背景要因として、母親の民族的背景と同時代の人種差別に関連した動向と父親による性的虐待に関する2つの仮説の妥当性は低いと考えられる。そしてKoepeleとTexeiraの仮説に関しても、個々の指摘は興味深いが、ガブリエルの病理も母親の心理的問題も主張されるほど深刻なものではないように考えられる。したがって、妹の誕生をきっかけとし、ガブリエルと母親の距離などの妹の誕生前のいくつかの要因を含めた、さまざまな両親の要因とガブリエルの要因が複雑に絡み合っ、ガブリエルの症状が表れたと考えるのが妥当だと思われる。なお、最後に検討するように、ウィニコットは背景要因に関して多様な理解を許容する姿勢をもつと考えられるが、母親の民族的背景、父親の性的虐待、そして母親の心理的問題の主張はその許容範囲を超えるのではないだろうか。

4. ウィニコットの背景要因に関する考え方についての検討

複数の背景要因仮説を生んだ要因の一つに、最初に述べたようにウィニコットの記述の仕方があ。ウィニコットは『ピグル』においてガブリエルの背景要因に関して妹の誕生に関連する記述が

多いものの、それらに意外なほどあっさりと言及しており、妹の誕生要因以外の一なかには矛盾する一事実も多く記載している。本論文で検討したように、ガブリエルの背景要因が多様で複雑である可能性も影響しているであろうが、なぜウィニコットは背景要因に関する自分の考えをもっと明確に記述しなかったのだろうか？ これに関しては3つ理由が考えられる。

第一に、『ピグル』はウィニコットが亡くなった後の出版であるため、ウィニコット自身が十分な記述をできなかった可能性である。第二に、ウィニコットが序で、読者が『ピグル』の素材とその展開に対して自分なりの考えを発展させることを望んでおり、それを妨げない程度のコメントにしたと述べている点である。すなわち、ウィニコットは読者自身による独自の読みを勧めるため、敢えて自分の考えについて最小限の記述を行ったことが考えられる。この態度から、ウィニコットは、少なくともガブリエルのような矛盾する素材を含む多様で複雑な背景要因をもつケースにおいては、背景要因に関して一つの正しい答えがあるのではなく、さまざまな理解が可能であると考えていたことが推測できる。

第三に、ウィニコットの背景要因の理解が明確な記述を拒むものであった可能性がある。おそらくそれにはウィニコットの背景要因の取り扱いに関する独自の考え方が関連している。Jamstedt (1993) は、ウィニコットがガブリエルの症状形成の「外的および内的要因が何であるかを検討していない」と述べ、「これらに関する疑問を保留したままにした」(p. 145)と主張している。そしてウィニコットが『ピグル』の序で言及したことに注目し、ガブリエルとの治療では、最初は方向性のない漠然とした遊びであるが、それに対するウィニコットの関わりから、ガブリエルの特定の問題が徐々に明確な形をなしていき、それがガブリエルに理解され、耐えられるようになっていくというプロセスを繰り返していることを指摘している。つまり、ウィニコットは背景要因を事前に明確にせず、治療の中で治療者が理解するだけでなく、むしろクライアントが理解するために明らかにすることを重視しているようである。この主張を裏づける記述が『ピグル』にはいくつかみられる。例えば、『ピグル』には背景要因の一つとして最も重要である、ガブリエルに妹ができたのと全く同じ年齢で母親に同胞が生まれていたことをウィニコットは知らずに治療を行っていたことが母親からの最初の手紙の注に記されている。この書き方は、ウィニコットは親から事前の情報収集を綿密に行ってクライアントの症状の背景要因に関する仮説をたてることをあまり重視していないようである。実際、ウィニコットは得られた事前情報にとらわれずに治療を進めている。例えば、母親からの最初の手紙でガブリエルの症状が妹の誕生から始まったということと授乳に関して問題はなかったという情報を既に得ていたにもかかわらず、最初のセッションで、ガブリエルの「哺乳ビンを持っていたの」という発言に、ウィニコットはすぐに授乳に関する問題がなにかあったことを推測し、「哺乳ビンを飲んでいたと言ったんだね？」とその問題の可能性を治療の中で探求しようと

している。

以上から、ウィニコットの『ピグル』にみられる背景要因への関わり方は次のようなものであると推測できる。ガブリエルの症状についての背景要因の多様性と複雑性を重視し、さまざまな要因を整合性のある体系の中にまとめようとせず、そして相互に矛盾する要因を解決しようとせず、保留したまま治療に臨んでいたことが推測できる。それは仮説を固めることで、それに縛られて、仮説に合わない素材を見逃すことや、歪曲して解釈する可能性を避けるためであり、また治療の流れを治療者が特定の方向に方向づけないようにし、クライアントとの相互作用にゆだねることを重視するためと推測できる。したがって、ウィニコットは背景要因に関して明確に体系化することを避け、緩やかで柔軟な理解を保持して治療をおこなっていたことが伺え、そのような理解の仕方が『ピグル』における曖昧な記述に反映されたと考えられる。また、さまざまな背景要因の説明が可能であるという考えを考慮すると、治療者とクライアントに組合せと治療プロセスに応じて異なる背景要因の理解が生じるとウィニコットが考えていたことも推測できる。そして、その理解は治療者だけでなく、むしろクライアントに生じることを重視していたと考えられる。

以上から、ウィニコットが背景要因に関して明確な記述をしなかったのは、死後のため十分な記述ができなかったことや、読者の読みを妨げないように記述を控えたことだけではないことが考えられる。つまり、ウィニコット自身の背景要因の理解が多様で複雑であり、矛盾を含んだ緩やかなものであり、クライアントと治療者が交流する治療プロセスの中で形作られる変形可能な柔軟なものであったため、明確な記述ができないものであった可能性がある。

5. おわりに

本論文ではD. W. ウィニコットの『ピグル』に関する海外の先行研究を概観した。なかでも先行研究の争点であるクライアントであるガブリエルの症状の背景要因に焦点を当てた。先行研究が提出する背景要因の仮説は、①妹の誕生、②母親の民族的背景、③父親による性的虐待、④母親の心理的問題の4つに分類できると考え、それぞれに検討を加えた。その結果、妹の誕生を中心とした多要因の影響を考慮することが妥当と考えられた。最後に、複数の背景要因仮説を生んだウィニコットの背景要因に関する柔軟な考えを検討し、次のような特徴をもつことを推測した。それらは、①背景要因はさまざまな説明が可能である、②背景要因を無理に整合性のある体系にせず、矛盾する要因も含めたまま緩やかに理解する、③症状の背景要因に関する綿密な情報収集により仮説を固めることで治療者と治療プロセスを縛るのを避ける、④背景要因の理解は治療場でクライアントと

の相互作用の中でクライアントに形成されることを重視する、である。

まだ残る課題として、子供の精神分析家として著名なD. W. ウィニコットがその治療の全過程を報告した『ピグル』に見られる治療理論と技法に関して、海外文献だけでなく北山 (2004) の考察も併せて検討することがあげられる。本論文でも背景要因に関するウィニコットの考え方と取り扱いの一部を推測したが、これらは彼の治療理論全体のなかで考えることが必要であろう。M. クラインの理論を基盤にしながら、環境要因と遊びを重視し、柔軟な治療構造をもったD. W. ウィニコットの治療方法を検討することは、子供の心理療法をおこなう者にとって有益であると考えられる。

<注>

- 1) J. リビエールとは2度目の分析であり、最初の分析は、S. フロイトがドイツ語で書いた精神分析の著作をフロイト自身の依頼で英語に翻訳 (スタンダード・エディションと呼ばれる) したことで知られるJ・ストレイチー (J. Strachey) から受けている。このストレイチーからウィニコットはM. クラインを紹介された。
- 2) H. Guntripは、日本では『対象関係論の展開—精神分析・フロイト以後』(小此木啓吾・柏瀬宏隆訳 誠信書房 1981年) で知られ、対象関係論の発展に貢献した人物である。
- 3) M. I. Littleは、ウィニコットとの精神分析の体験が『ウィニコットとの精神分析の記録 新装版—精神病水準の不安と庇護』(神田橋條治訳 岩崎学術出版社 2009年/1992年) で翻訳されており、他に『原初なる一を求めて—転移神経症と転移精神病』(神田橋條治・溝口純二訳 岩崎学術出版社 1998年) の翻訳もある。
- 4) ガブリエルの現在の年齢は49歳 (2011年1月現在) であり、御両親も健在である可能性がある。
- 5) 他にイタリア語で書かれた文献が3つ発表されているが、筆者がイタリア語を理解しないため、本論文の検討から除外した。なお、英文要約によると、この3つの論文は全て『ピグル』におけるウィニコットの治療理論と技法に焦点を当てている。
- 6) 北山は2004年に『錯覚と脱錯覚』の改訂版を出版しており、両者に内容の大きな差はないが、本論文では改訂版を参考にした。
- 7) ガブリエルの症状の背景要因に関する考察の発表がこれ程遅れたのは、『ピグル』のいたるところに暗示されているように、ガブリエルの両親が精神分析の世界とつながりをもっていたことなどが影響していると考えられる。おそらく、発表したものが両親の目に留まること、そしてガブリエルとその両親に有害な影響を与えることへの配慮が発表を遅らせたと考えられる。
- 8) 『ピグル』本文におけるウィニコットのコメントは、両親は「内的プロセスを用いてものごとを解決する子どもの能力の肯定的側面を理解できなかったように思われた」(p. 15) である。
- 9) この点に関して論文に詳しい説明がないが、おそらく第二次世界大戦でドイツに併合されたドイツ民族が住むチェコのズデーテン地方などの住民のことを指すと考えられる。例えば、ズデーテンはドイツに併合されたが、第二次世界大戦後にチェコに戻され、住んでいたドイツ民族はこの地方から追放されている。
- 10) lickingと言ったのはガブリエルではなくウィニコットであり、ウィニコットは授乳の意味で使用している点で、これはTernellの少々強引な解釈と考えられる。
- 11) 『ピグル』の翻訳では、このテディベアはウィニコットの相談室にあった玩具のように訳されているが、ガブリエルが家から持って来たものである。
- 12) 北山 (2004) は、ガブリエルの背景要因を妹の誕生がきっかけとしながらも、「それ以前に、生後6カ月の頃すでにこの子は母親と分離して新しく両親とエディプス的関係をつくりださねばならない状況にあったが、母親を憎んで父親を愛するという全人格で経験される三角関係を体験するのには、いまだに十分に母と分離できてはいなかったという問題があった。つまり、このように母親がいまだ主観の対象であるときに妹が生まれ…急激な『幻滅』」(p. 112) を体験したと述べている。このように北山は、その原因は検討していないが、妹の誕生以前に生じたガブリエルが母親と距離をとらなければならなかった状況を重視している。この点で妹の誕生仮説と似ているものの強調点が異なり、またガブリエルの絶対依存段階における育児の良さと両親に対するウィニコットからの信頼を主張している点で、母親の心理的問題仮説とも異なっている。

<参考文献>

- Chales, M. (1999) The Piggle: Confrontations with non-existence in childhood, *International Journal of Psychoanalysis*, 80 (4), pp. 783-795.
- Chazan, S. E. (1997) Ending child psychotherapy: Continuing the cycle of life. *Psychoanalytic*

- Psychology*, 14 (2) . pp. 221-238.
- Fairbairn, W. R. (1952) *Psychoanalytic studies of the personality*. London: Tavistock.
- Fanon, F. (1967) *Black Skin, White Masks*. C.L. Markmann (Trans.) New York: Grove Press.
- Fordham, M. (1978) The Piggie (Book) . *Journal of Analytical Psychology*, 23 (Issue 4) , pp. 371-372.
- Freud, S. (1900) Interpretation of Dreams. *Standard Edition*, 4. London: Hogarth Press.
- Guntrip, H. (1986) My experience of analysis with Fairbairn and Winnicott. *International Review of Psycho-Analysis*, 78, pp. 1-14.
- Greenberg, J. R. & Mitchell, S. A. (1983) *Object Relations in Psychoanalytic Theory*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Hood, J. R. (1980) The Piggie. An Account of the Psycho-Analytic Treatment of a Little Girl (Book) . *Journal of Child Psychology & Psychiatry & Allied Disciplines*. 21 (Issue 3) , pp.274.
- Hogan, P. C. (1992) The politic of otherness in clinical psychoanalysis: Racism as pathogen in a case of D. W. Winnicott. *Literature and Psychology*, 38 (4) , pp.33-43.
- Jemstedt, A. (1993) A comment on Teurnell's 'The Piggie. A sexually abused girl?'. *International Forum of Psychoanalysis*, 2 (3) , pp.145-148.
- 北山修 (2004/1985) 『改訂 錯覚と脱錯覚ーウィニコットの臨床感覚』 岩崎学術出版社
- Koepele, K. C. & Teixeira, M. A. (2000) Annihilation anxiety: A metapsychological exploration of D. W. Winnicott's The Piggie. *Psychoanalysis & Psychotherapy*. 17 (2) , pp.229-256.
- Lacan, J. (1974) *Televisión*. Paris: Editions du Seuil.
- Little, M. L. (1990) *Psychotic anxieties and containment: A personal record of an analysis with Winnicott*. Lanham: Jason Aronson.
- Matte-Blanco, I. (1975) *The Unconscious as Infinite Sets*. London: Duchworth.
- Matte-Blanco, I. (1988) *Thinking, Feeling, and Being*. London and New York: Routledge.
- 松木邦裕 (1996) 『対象関係論を学ぶークライン派精神分析入門』 岩崎学術出版社
- Reeves, C. (2006) The anatomy riddance. *Journal of Child Psychotherapy*, 32 (3) , pp.273-294.
- Shepherd, R., Johns, J., & Robinson, H. T. (1996) Introduction .In *Thinking about children*, R. Shepherd, J. Johns, & H. T. Robinson. Reading, MA: Addison-Wesley, 1996, pp.xix-xxxii (牛島定信・藤山直樹・生地新監訳 (2008)『子どもを考えるーウィニコット著者集4』 岩崎学術出版社 所収) .
- Ternell, L. (1993) An alternative reading in Winnicott: The Piggie: A sexually abused girl? *International Forum of Psychoanalysis*, 2 (3) , pp.139-144.
- Winnicott, D. W. (1960) The theory of the parent-infant relationship. In *The Maturation Processes and the Facilitating Environment*. New York: International Universities Press, 37-55 (牛島定信訳 (1977) 『情緒発達の精神分析理論ー自我の芽生えと母なるもの』 岩崎学術出版社 所収) .
- Winnicott, D. W. (1967) The aetiology of infantile schizophrenia in terms of adaptive failure. In *Thinking about children*, R. Shepherd, J. Johns, & H. T. Robinson. Reading, MA: Addison-Wesley, 1996, pp.218-223.
- Winnicott, D. W. (1971) *Therapeutic Consultations in Child Psychiatry*. London: Hogarth Press & The Institute of Psycho-Analysis. / New York: Basic Books (橋本雅雄監訳 (1987) 『子どもの治療相談1・2』 岩崎学術出版社) .
- Winnicott, D.W. (1977) *The Piggie: An Account of Psychoanalytic treatment of a little Girl*. E. Ramzy, (Ed.) New York: International Universities Press (猪股丈二・前田陽子訳 (1980)『ピグルー分析医の治療ノート』 星和書店) .
- Winnicott, D. W. (1986) *Holding and interpretation: Fragment of an analysis*. New York: Grove Press (北山修監訳 (1995) 『抱えることと解釈』 岩崎学術出版社) .